

忘れられない、忘れてはならない 引き揚げ^{※1}の記憶

京都市伏見区 手塚良子(84歳)

私の兄弟姉妹は9人で、全員が朝鮮(韓国)で生まれています。長姉は18歳、末っ子の妹は生後3週間目に生地を離れ、引き揚げてきました。

引き揚げの日から半世紀以上も経っているのに、当時10歳だった私の脳裏に忘れられないものとして残っていて、情景までが浮かび上がってきます。姉がそれぞれの身の丈に合わせて作ってくれたリュックサックに、持てるだけの荷物を詰めて背負い、両肩からかけた袋。3歳の妹に至るまで同じ姿でした。町外れの広場に集まり、引き揚げ列車を待ちました。牛馬を乗せる貨物列車が引き揚げ列車でした。私たちの町から通常なら1日もかからないところを、釜山^{プサン}まで3日3晩かかりました。その間、生まれたばかりの妹のミルクをアルマイト^{※2}のコップで溶かし、ろうそくの火で温めて飲ませていた母の姿は忘れられません。

釜山からの引き揚げ船はあちこちの町から集まってきた引き揚げ者でぎっしりでした。体を横にする場もなく、父や姉は階段に座っていました。その日の玄界灘がひどく荒れて苦しかったことを覚えています。翌朝、初めて見る遙か彼方の陸地が日本だと、甲板で人々が歓喜の声を上げていました。私は今でも唱歌「ふるさと」を歌うとき、この時の情景を思い出します。

2日後、やっと博多に上陸したのが、私の日本への第一歩です。それからの検査は、全身が真っ白になるほどDDT^{※3}をかけられたり、コッペパンを1個ずつ配られたり、難民の行列さながらでした。家族も離ればなれの行列で、小学4年生の私と2年生の弟はどの場でもしっかりと手をつないで行動しました。父の本籍地である京都に着いたのは、生地を発ってから1週間後でした。それから、両親の戦後の生活との闘いが始まりました。

昭和10年(1935年)生まれの私が育った朝鮮全羅北道群山府は当時、日本人の町でした。日本敗戦のその日まで、この町で暮らしていることに何の違和感もありませんでした。学校から行く遠足や行軍^{※4}で歩く郊外は、行けども行けども続く稲穂の波と一本道のポプラ並木。秋になると今も鮮明に私の脳裏によみがえります。全羅道は肥沃な土地で、朝鮮半島第一の穀倉地帯でした。日本の植民地であった当時の農場主は全て日本人。群山港から内地(日本)に向けて朝鮮米を出荷していました。その生業の上に私たちの生活があったのだということは、戦後の教育で初めて知りました。

73年前、文部省が作った『あたらしい憲法のはなし』^{※5}で新憲法を習った時、「戦争は終わった」と実感した感動を後世に伝えたいと心から思います。そして、正しい歴史教育は、次の世代を担う子どもたちに最も重要なことだと思っています。

用語解説

- ※1 1945年8月15日時点で、日本の外地または占領地などにおいて生活基盤を有する一般日本人が、太平洋戦争および日中戦争における日本の敗戦に伴い日本本土(内地)へ戻されること
- ※2 アルミニウムの表面を酸化させて膜を作り、腐食しにくくしたもの
- ※3 有機塩素系の殺虫剤、農薬。シラミなどの防疫対策として外地からの引き揚げ者や、一般児童の頭髪に粉状の薬剤を浴びせた
- ※4 軍隊が隊列を組んで長距離を行進・移動すること。戦時中は授業の一環として行われた
- ※5 終戦後の1946年、日本国憲法が公布されたことを受け1947年に刊行された、新制中学校1年生用の社会科の教科書。日本国憲法の本質や中身を易しく解説している



原爆投下からの10日間

京都市左京区 吉沢保枝(92歳)

昭和20年(1945年)1月から、私たち広島女子専門学校数学科1回生は、岡山県倉敷市郊外にある三菱重工業水島航空機製作所へ学徒動員として駆り出され、海軍の一式陸上攻撃機の部品である風防製作に当たっていた。

8月8日の朝、会社から「6日に広島に空中魚雷という新爆弾が落とされたそうだ。広島から来ている人はすぐ帰りなさい。親や兄弟が生きるとは絶対に思わないでください」という一斉指示があった。寄宿舎生活^{※1}を送っていた私たちは、被爆者の看護のため翌朝倉敷を出発、山陽本線が不通のため、中国山地を通る伯備線と芸備線乗り継いで広島へ向かった。列車はゆっくりと進み、翌日10日の朝、やっと学校に辿り着いた。

学校は爆心地から離れていたため、半倒壊の状態であったが焼失は免れており、すでに臨時の救護所になっていた。爆心地に勤労奉仕に行っていた県立第二女学校の生き残った負傷者と、隣接する陸軍共済病院から溢れてくる、ケガややけどを負った人々でいっぱいであった。

教室では、くっつけた机の上にむしろを敷いた即席ベッドに、多くの負傷者が横たわっていた。あちこちから「水、ミズがほしい……」とうめき声が聞こえてくる。水を飲ませようにも、ほとんどの人が口を開けることもできず、水を吸う力もない。

傷の手当てをしようにも、やけどが化膿したところにつける薬もない。ただ、赤チンキを塗るだけである。どこからともなく飛んでくる蠅を追い払うのも大変なことであった。蠅はやけどした皮膚の上に卵を産み付けるのだ。卵から孵化した幼虫を見つけ次第、ピンセットで一匹ずつつまみとった。赤チンキの赤、膿の黄、蠅の黒の3色で爛れた皮膚は目を覆うばかりであった。

次第に薬も無くなり、脱脂綿も消毒液もタオルも品切れとなってしまった。やけどをしている人たちの体は異臭を放ち、教室は臭気に満ちた。次から次へと、死者が増える。軍の衛生兵らしき人が、学校に隣接したれんこん畑で材木を積み重ねて死体を焼いた。毎日、毎日、死体を焼く臭いが付近一帯に漂った。

3日後、米軍の飛行機が1機飛んでいった。空襲警報も鳴らなかったし、私たちはもう防空壕に逃げ込もうとも思わなかった。つい1カ月前には、水島航空機製作所が100機編隊のB29爆撃機に爆撃され、私たちは雨あられと投下される爆弾の下を逃げ回っていたのに。「戦争に負けた!」と痛感せざるを得なかった。

8月15日。学校の事務室前で玉音放送を聞いた。もう逃げ回らなくても良いのだ! 死と向かい合わなくても良いのだ! 「戦争が終わった」とは、何と素晴らしいことだろう。

私は青い空を見上げて、何年ぶりかの深呼吸をした。

※1 広島女子専門学校(現・県立広島大学)は当時、西日本を中心に朝鮮、樺太(サハリン)からの学生が多く、多くは寄宿舎生活を送っていた

ヒバクシャ国際署名 皆さまのご協力をお願いいたします

ヒバクシャ国際署名は、誰もがすぐにできる世界平和の活動です。一つひとつの声は小さくても、みんなが集まれば世界を動かす力となります。

10万筆を目標に2017年から取り組んできたヒバクシャ国際署名は、7月6日現在で98,582筆となりました。10万筆まで、さらに平和の願いを集めて取り組んでいます。皆さまのご協力をお願いします。

オンライン署名は
こちらから↓



12ページにもヒバクシャ国際署名に関する記事を掲載しています。こちらをご覧ください。